

学生の芸術文化鑑賞活動の現状

ー第5回学生調査の10%抽出データの分析からー

福永 征世 有馬 昌宏
兵庫県立大学応用情報科学研究科

What Do University Students Appreciate as their Culture and Arts related Activities?
A Preliminary Analysis based on 10% Distraction Data from 5th Student Survey

Masatoshi FUKUNAGA and Masahiro ARIMA
Graduate School of Applied Informatics, University of Hyogo

要旨

1985年度からほぼ5年の周期で実施している全国の学生を対象とした意識・実態調査（「学生の芸術意識と芸術活動に関する調査」）のうち、2008年度に実施した第5回調査の10%抽出の入力データから、学生の芸術文化の需要構造の実態の現状を紹介する。

キーワード：学生調査，質問紙調査，文化芸術関連活動，実態・意識調査

1. はじめに

高度経済成長を達成した上で、人口高齢化、高学歴化、高度情報化といった社会構造の変化を迎えている我が国では、国民の要求は物質的豊かさの追求から精神的に充実した生活を送る方向へと向かってきており、文化・芸術に対する関心も量的増大と質的多様化を見せはじめてきている。このような状況の中、平成13年に「文化芸術振興基本法」が施行され、平成19年には「文化芸術の振興に関する基本的な方針」が閣議決定されるに至っているが、景気の低迷を受けて文化・芸術関連活動者が低迷する一方で、地域振興や地域活性化に果たす文化・芸術の役割が注目されるなど、国民ならびに地域住民の福祉向上に直結する文化政策の立案・実施への関心、および民間部門はもとより、公的部門におけるアーツ・マネジメントやアーツ・マーケティングに対する関心が高まってきている。

アーツ・マネジメントとは、「今日の社会の中における芸術文化の意義（使命）を明らかにすることを通して、芸術文化の有効性（組織の共通目的を達成する能力）と能率（参加者の欲求を満足させる能力）を拡大し、それを以て芸術文化組織の発展、さらには芸術文化の振興をはかっていく仕事」（伊藤他[4], p.12）であると定義されている。この定義に基づけば、アーツ・マネジメントには、Experience Basedの感覚的検証ではなく、Evidence Basedの客観的検証が必要となり、文化・芸術の有効性や能率を数値化して評価し、PDCA（Plan-Do-Check-Action）のマネジメントサイクルをきちんと回していくことが求められる。

表1 日本で実施されている実演芸術の鑑賞状況に関する意識・実態調査の状況

調査実施主体	総理府 内閣府	総理府 内閣府	文化庁	財団法人日本 生産性本部	日本放送協会
調査名	社会生活 基本調査	文化に関する 世論調査	国民の文化 に関する 意識調査	余暇活動に 関する調査	国民生活 時間調査
調査年	1976年以降 5年ごと	1987・1996・ 2003・2009年	1993年と1999 年	1977年以降 毎年	1960年以降 5年ごと
これまでの調査回数	7回	4回	2回	33回	10回
調査対象	全国の世帯 (10歳以上の 世帯員)	全国20歳以上 の男女	全国20歳以上 の男女	5万人以上の 都市に居住の 15歳以上男女	全国10歳以上 の国民
最近調査でのサンプル数	約77,000世帯	3,000	2,000	3,000	12,600
最近調査での回答者数	約200,000人	1,853	1,509	2,415	7,718
調査項目としての実演芸術の分野数	3	3(7ジャンル)	7	3	1
1) 伝統演劇	4ジャンル	○	○(6ジャンル)	○	○
2) 現代演劇	8ジャンル		○		
3) オペラ等	6ジャンル		○		
4) 舞踊・舞踏・バレエ等	9ジャンル		○		
5) 大衆芸能	6ジャンル		○(1ジャンル)		
6) クラシック音楽	13ジャンル		○		
7) ポピュラー音楽	10ジャンル		○		

(表中の○は、対応する実演芸術分野の過去1年間の鑑賞行動の有無が調査されていることを示す)
(表側の調査項目としての実演芸術の分野数のジャンルの数は、学生調査での分類数である)

しかし、Evidence Based のアーツ・マネジメントに必要とされる統計情報に目を向けると、我が国の文化・芸術に関する統計情報の整備は、有馬[1, 3]や加藤・有馬[5, 6]が指摘しているように、1976年に開始された社会生活基本調査などをはじめとして近年になって漸く着手された段階であり、しかも詳細な分析を行うために必要な分野や種目の細分類による鑑賞・活動実態の継続的かつ体系的な把握は、表1に示すように行われていないのが現状である。

このような状況を踏まえ、マイクロ統計データ（個票データ）に基づく文化・芸術の需要サイドの分析の重要性を早くから認識していた松田芳郎（一橋大学名誉教授）らの研究グループにより、文化・芸術情報の体系化と統計調査方法の確立を目的として、文化・芸術の需要者側の実態調査『学生の芸術意識と芸術活動に関する調査（以降、学生調査と略記）』が1985年、1991年、1996年、2002年、2008年の各年度で実施され、調査研究が進められてきている（三善[10]、永山[9]、杉江[8]、周防[7]）。

すでに実査は完了している第5回調査については、費用の関係から回収された調査票の一部分の入力しか完了していないが、本研究では、入力完了している817のサンプル（全回収調査票の10.6%）に基づき、第5回調査の結果を報告する。

2. 学生調査の概要

学生調査は全国の学生を対象としており、大標本を確保しながら限られた費用で調査を実施するために、大学教員のネットワークを活用して、全国の大学の地域と専門分野別の分布を考慮する割当法で標本抽出を行って調査を実施している。有効回答サンプル数は第1回調査で10,570、第2回調査で10,819、第3回調査で10,061、第4回調査で3,763である。第5回調査では2010年2月末時点で7,682の調査票が回収されているが、2009年度に10%抽出で817サンプルのデータを入力しており、第1回から第5回までの各調査のサンプルの構造は表2に示すとおりである。

表2 学生調査のサンプル構造

		第1回調査(1985年度)			第2回調査(1991年度)			第3回調査(1996年度)		
		母集団	有効回収 サンプル	抽出率 (%)	母集団	有効回収 サンプル	抽出率 (%)	母集団	有効回収 サンプル	抽出率 (%)
設立 形態 別	大学	1,734,080	7,879	0.454	2,052,338	8,312	0.405	2,368,992	8,980	0.379
	短期大学	377,107	1,449	0.384	497,569	1,032	0.207	463,948	733	0.158
	高等専門学校	-----	-----	-----	19,816	180	0.908	21,608	80	0.370
	専修学校	579,274	1,242	0.214	834,713	1,155	0.138	799,551	185	0.023
	大学院	-----	-----	-----	98,650	87	0.088	164,350	83	0.051
性別	男子	1,666,991	5,404	0.324	2,010,715	6,346	0.316	2,136,180	5,386	0.252
	女子	1,023,470	4,949	0.484	1,492,371	4,375	0.293	1,682,269	4,414	0.262
専攻 分野	文芸系学部	879,530	4,757	0.541	1,155,315	3,387	0.293	1,045,345	2,573	0.246
	社会系学部	785,304	3,875	0.493	1,054,629	4,597	0.436	1,157,923	5,497	0.475
	理工系学部	498,968	1,101	0.221	857,863	2,092	0.244	1,076,724	1,280	0.119
	保健系学部	179,226	664	0.370	309,838	548	0.177	372,262	664	0.178
地域 別	北海道・東北	206,564	989	0.479	269,809	792	0.294	314,556	992	0.315
	関東	1,402,891	5,496	0.392	1,420,887	3,445	0.242	1,569,385	3,397	0.216
	甲信越・北陸・東海	76,915	326	0.424	457,024	1,747	0.382	528,336	1,362	0.258
	近畿	553,685	1,751	0.316	652,747	1,724	0.264	747,803	2,197	0.294
	中国・四国	172,743	1,025	0.593	227,008	1,192	0.525	266,181	761	0.286
	九州・沖縄	241,398	983	0.407	309,666	1,867	0.603	370,580	1,352	0.365
全体		2,690,461	10,570	0.393	3,503,086	10,770	0.307	3,818,449	10,061	0.263

		第4回調査(2002年度)			第5回調査(2008年度)		
		母集団	有効回収 サンプル	抽出率 (%)	母集団	有効回収 サンプル	抽出率 (%)
設立 形態 別	大学	2,499,147	3,678	0.147	2,520,593	740	0.029
	短期大学	267,086	0	0.000	172,725	20	0.012
	高等専門学校	21,336	0	0.000	59,446	17	0.029
	専修学校	765,558	41	0.005	-----	-----	-----
	大学院	223,512	44	0.020	262,686	12	0.005
性別	男子	2,085,120	1,804	0.087	2,011,622	423	0.021
	女子	1,691,519	1,954	0.116	1,661,331	366	0.022
専攻 分野	文芸系学部	1,144,781	2,170	0.190	1,062,559	173	0.016
	社会系学部	1,128,365	1,302	0.115	934,495	347	0.037
	理工系学部	889,537	162	0.018	725,157	251	0.035
	保健系学部	506,089	129	0.025	295,674	29	0.010
地域 別	北海道・東北	324,816	371	0.114	246,482	46	0.000
	関東	1,579,021	1,066	0.068	1,291,756	261	0.000
	甲信越・北陸・東海	523,758	704	0.134	418,189	245	0.001
	近畿	757,073	1,124	0.148	620,145	122	0.000
	中国・四国	261,781	178	0.068	211,543	98	0.000
	九州・沖縄	372,227	324	0.087	276,873	45	0.000
全体		3,776,639	3,767	0.100	3,015,450	817	0.000

注1) 母集団の構造は、第1回調査では文部省「昭和59年度学校基本調査」、第2回調査では「平成3年度版学校基本調査」、第3回調査では「平成8年度版学校基本調査」、第4回調査では「平成14年度版学校基本調査」、第5回調査では「平成20年度版学校基本調査」から計算している。

注2) 設立形態別、性別、専攻分野別、地域別の有効回収サンプルには分類が不明のサンプルは除外されているため、合計しても全体の有効回収サンプル数には一致しない。

学生調査では芸術・文化の需要構造の実態把握に焦点を当てており、調査票の質問は、大別すると、実演芸術7分野64ジャンル(第1回調査は48ジャンル)のライブでの鑑賞経験(過去通算と過去1年)と実演芸術7分野のメディアによる鑑賞経験(過去1年)を問う質問群、映画鑑賞と美術などの視覚芸術鑑賞の経験と鑑賞場所を問う質問群、鑑賞行動に影響を与える文化・芸術への意識に関する質問群、稽古事や主体的芸術活動の有無と活動時期に関する質問群、読書に関する質問群、および鑑賞行動と何らかの関連を持つと考えられる個人的属性に関する事項を問う質問群とから構成されている。調査方法は原則として、講義など学生の集まる時に調査票を配布して、その場で記入させるか、または次の同講義の際に回収するという方法で実施されている。

また、第5回調査の入力サンプル分を含めて、過去の学生調査のデータは、加藤・有馬[5, 6]によって個別の調査の横断面分析や任意の調査回を選択しての比較や時系列分析が容易となるようにデータベースが構

表3 過去1年間の実演芸術のライブ鑑賞の行動者率

	第1回調査			第2回調査			第3回調査			第4回調査			第5回調査		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
伝統演劇	---	---	---	5.3	2.1	9.7	4.0	2.1	6.2	5.6	2.5	8.4	11.2	7.4	15.3
1. 能・狂言	2.6	2.3	2.9	2.4	1.1	4.2	2.3	1.2	3.5	3.2	1.4	4.9	7.9	6.1	9.9
2. 文楽	0.7	0.5	1.0	0.6	0.3	1.1	0.6	0.4	0.8	0.9	0.5	1.3	2.1	1.8	2.3
3. 歌舞伎	11.5	3.3	20.5	3.0	0.9	5.9	1.8	0.8	3.0	2.0	0.6	3.3	4.8	2.4	7.4
4. 現代歌舞伎	---	---	---	0.4	0.2	0.8	0.3	0.1	0.4	0.2	0.1	0.3	---	---	---
5. その他の伝統演劇	0.2	0.1	0.3	0.2	0.1	0.4	0.2	0.1	0.3	0.3	0.2	0.4	0.8	0.3	1.4
現代演劇	---	---	---	11.7	7.6	17.5	11.5	7.0	16.7	10.8	8.7	12.7	23.2	19.7	27.0
6. 演劇	8.6	5.2	12.3	4.9	3.1	7.4	5.6	3.4	8.1	5.5	4.7	6.3	13.7	12.6	14.8
7. ボビュラー演劇	1.5	1.3	1.8	1.1	0.7	1.6	1.0	0.8	1.3	1.3	1.1	1.5	3.1	2.9	3.4
8. 新派・新国劇	0.4	0.1	0.8	0.2	0.1	0.5	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1	---	---	---
9. 現代的小劇場	0.6	0.7	0.4	1.8	0.9	3.0	1.3	0.7	1.9	0.8	0.5	1.1	2.2	1.1	3.4
10. 外国劇団	0.8	0.6	1.2	0.8	0.3	1.5	0.7	0.3	1.3	0.5	0.4	0.6	---	---	---
11. アマチュア演劇	10.0	8.5	11.6	5.0	3.5	7.0	4.8	3.3	6.5	4.3	3.6	4.9	13.5	11.3	15.9
12. 児童劇	2.2	1.4	3.0	0.7	0.4	1.1	0.9	0.5	1.5	1.1	0.7	1.4	4.8	2.9	6.8
13. 人形劇	3.7	1.8	5.7	1.4	0.8	2.1	1.2	0.6	1.9	1.9	0.8	2.9	4.9	3.7	6.3
14. その他の現代演劇	0.4	0.2	0.7	0.2	0.1	0.4	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1	0.2	0.3	0.0	0.6
オペラ等	---	---	---	8.2	3.1	15.4	9.0	3.7	15.2	10.7	4.8	16.1	19.0	13.7	24.7
15. オペラ(日本)	4.7	1.6	8.0	1.5	0.4	2.9	1.3	0.6	2.0	3.0	0.8	4.9	5.6	3.2	8.2
16. オペラ(外来)	---	---	---	0.9	0.5	1.6	1.2	0.4	2.2	1.6	0.5	2.6	3.3	1.8	4.8
17. 日本人の創作オペラ	0.8	0.3	1.4	0.3	0.1	0.5	0.4	0.1	0.6	1.0	0.4	1.6	0.8	0.3	1.4
18. ミュージカル(日本)	---	---	---	5.3	1.9	10.1	5.7	2.1	10.0	6.5	2.8	9.9	12.4	10.0	15.1
19. ミュージカル(外来)	11.8	4.7	19.5	1.8	0.7	3.3	1.9	0.9	3.2	1.2	0.8	1.5	2.6	1.6	3.7
20. レビュー	---	---	---	0.6	0.1	1.3	0.4	0.1	0.8	0.6	0.2	0.9	3.1	1.8	4.6
21. その他のオペラ等	---	---	---	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1	0.3	0.0	0.6
舞踊・舞踏・バレエ	---	---	---	6.6	2.8	11.9	6.2	2.4	10.8	7.8	3.4	11.9	11.8	7.9	15.9
22. 日本舞踊・伝統芸能	1.3	0.5	2.2	1.1	0.6	1.9	1.0	0.4	1.7	1.9	0.9	2.8	4.0	2.9	5.1
23. 民俗・民族舞踊(日本)	---	---	---	0.5	0.4	0.8	0.6	0.3	0.8	1.4	0.8	1.9	1.5	1.6	1.4
24. 民俗・民族舞踊(外来)	1.0	0.7	1.3	0.8	0.3	1.5	0.8	0.3	1.4	1.1	0.3	1.9	1.2	0.8	1.7
25. バレエ(日本)	---	---	---	1.5	0.4	3.1	1.4	0.3	2.7	1.7	0.3	3.0	4.1	1.3	7.1
26. バレエ(外来)	5.5	1.0	10.4	1.4	0.2	3.0	1.4	0.3	2.8	1.2	0.0	2.3	2.2	0.8	3.7
27. モダンダンス(日本)	---	---	---	1.2	0.3	2.3	0.7	0.3	1.3	1.6	0.7	2.3	---	---	---
28. モダンダンス(外来)	2.0	0.8	3.3	0.3	0.1	0.7	0.2	0.1	0.4	0.5	0.2	0.7	---	---	---
29. 舞踏・パフォーマンス(日本)	---	---	---	1.3	0.7	2.1	1.2	0.7	1.7	1.0	0.7	1.4	---	---	---
30. 舞踏・パフォーマンス(外来)	0.9	0.5	1.2	0.5	0.3	0.9	0.9	0.3	1.5	0.6	0.3	0.9	---	---	---
コンテンポラリーダンス(日本・外来)	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	2.6	1.8	3.4
パフォーマンス(日本・外来)	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	4.5	3.4	5.7
31. その他の舞踊・舞踏等	0.5	0.2	0.8	0.2	0.1	0.4	0.2	0.1	0.3	0.2	0.1	0.3	0.1	0.0	0.3
クラシック音楽	---	---	---	17.1	10.4	26.4	16.1	8.9	24.8	23.1	13.3	32.1	27.9	21.8	34.4
32. オーケストラ(日本)	---	---	---	7.1	4.6	10.6	6.8	4.0	10.3	10.4	5.4	15.0	16.9	14.2	19.9
33. オーケストラ(外来)	16.3	10.9	22.1	2.5	1.2	4.3	3.2	1.1	5.7	4.6	1.8	7.2	5.7	3.7	8.0
34. ピアノリサイタル(日本)	---	---	---	3.0	1.3	5.4	3.0	1.4	5.0	7.1	1.8	12.0	12.3	8.2	16.8
35. ピアノリサイタル(外来)	9.7	3.4	16.5	1.5	0.5	3.0	1.7	0.5	3.2	3.3	0.6	5.8	3.4	2.1	4.8
36. 弦楽器リサイタル(日本)	---	---	---	2.9	1.7	4.7	2.7	1.5	3.9	4.8	2.3	7.1	6.8	5.0	8.8
37. 弦楽器リサイタル(外来)	5.7	3.3	8.4	1.2	0.4	2.2	1.4	0.5	2.4	2.1	0.8	3.3	3.0	2.1	4.0
38. 室内楽(日本・外来)	5.6	3.2	8.3	2.0	0.9	3.6	2.1	0.7	3.8	4.1	1.4	6.5	6.0	3.4	8.8
39. 管楽器(日本・外来)	4.8	3.0	6.8	3.6	2.0	5.8	3.1	1.3	5.3	5.5	3.0	7.7	7.8	5.3	10.5
40. 声楽リサイタル(日本)	---	---	---	1.5	0.6	2.7	1.6	0.6	2.7	4.5	1.5	7.2	6.6	3.7	9.7
41. 声楽リサイタル(外来)	5.6	2.2	9.4	0.4	0.2	0.6	0.4	0.1	0.7	1.0	0.3	1.7	---	---	---
42. 合唱(日本)	---	---	---	4.8	3.0	7.2	3.7	2.5	5.3	6.8	3.6	9.8	8.2	5.8	10.8
43. 合唱(外来)	11.9	7.4	16.9	0.6	0.4	0.9	0.6	0.2	1.1	0.7	0.1	1.3	---	---	---
44. 邦楽	2.0	1.4	2.6	1.2	0.8	1.8	1.0	0.6	1.5	3.0	2.1	3.8	4.2	2.9	5.7
45. その他のクラシック音楽	1.8	1.0	2.6	0.3	0.2	0.5	0.5	0.3	0.7	0.8	0.3	1.3	0.4	0.0	0.9
ボビュラー音楽	---	---	---	27.4	22.7	34.0	24.5	19.6	30.3	24.2	20.3	27.7	32.4	32.1	32.7
46. シャンソン(日本・外来)	0.6	0.5	0.6	0.4	0.1	0.8	0.7	0.2	1.3	0.2	0.1	0.3	---	---	---
47. ジャズ(日本)	---	---	---	2.4	2.2	2.6	2.9	2.3	3.6	3.1	2.3	3.8	6.0	6.3	5.7
48. ジャズ(外来)	5.8	6.8	4.7	1.7	1.5	2.1	2.9	2.3	3.6	3.1	2.3	3.8	6.0	6.3	5.7
49. ロック(日本)	---	---	---	10.7	9.6	12.3	8.7	8.4	9.2	9.5	10.3	8.7	15.0	18.2	11.7
50. ロック(外来)	21.2	21.4	21.0	4.7	5.2	3.9	3.9	5.1	2.5	2.6	3.4	1.9	4.1	4.7	3.4
51. ニューミュージック・フォーク(日本)	---	---	---	---	---	---	2.3	1.8	2.9	1.4	1.0	1.7	---	---	---
52. ニューミュージック・フォーク(外来)	---	---	---	---	---	---	0.5	0.3	0.7	0.2	0.1	0.3	---	---	---
ニューミュージック(日本)	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---
ニューミュージック(外来)	21.4	17.1	26.0	11.4	8.2	15.8	---	---	---	---	---	---	2.3	2.9	1.7
フォーク(日本・外来)	4.0	4.1	3.8	1.0	0.6	1.6	---	---	---	---	---	---	---	---	---
53. ポップス(日本)	---	---	---	---	---	---	11.1	6.9	16.2	13.3	9.3	17.1	19.3	16.6	22.2
54. ポップス(外来)	---	---	---	---	---	---	1.7	1.0	2.4	1.2	1.0	1.3	2.9	2.4	3.4
55. 歌謡曲	9.2	8.5	9.9	3.2	2.4	4.4	0.7	0.4	0.9	0.7	0.3	1.1	1.5	1.6	1.4
56. 演歌	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	1.0	1.1	0.9
57. 民謡	0.4	0.3	0.5	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.6	0.2	0.9	---	---	---
58. その他のボビュラー音楽	1.9	1.5	2.2	0.9	0.7	1.2	0.6	0.5	0.6	0.9	1.0	0.8	0.4	0.5	0.3
大衆芸能	---	---	---	6.7	5.3	8.5	7.6	5.0	10.3	8.8	6.0	11.3	15.9	14.7	17.1
59. 落語・漫才	4.2	4.2	4.1	2.6	2.0	3.5	3.2	2.3	3.9	5.5	3.6	7.3	---	---	---
60. 浪曲・講談	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.1	0.3	0.1	0.1	0.1	11.1	11.1	11.1
61. 奇術	0.9	0.9	0.9	0.5	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.6	0.4	0.7	---	---	---
62. 芸能ショー	6.6	2.4	11.2	0.9	0.8	1.1	1.8	0.8	2.9	0.9	0.7	1.1	2.7	2.9	2.6
63. 大衆演劇	0.8	0.6	0.9	0.5	0.5	0.6	0.3	0.2	0.4	0.3	0.4	0.3	---	---	---
64. サーカス	5.0	4.1	6.1	2.8	2.1	3.7	2.6	2.0	3.4	3.2	2.5	3.9	8.3	7.6	9.1
65. その他の大衆芸能	0.3	0.2	0.4	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.4	0.5	0.3
その他	3.2	1.2	5.4	0.6	0.5	0.8	0.6	0.6	0.5	0.3	0.2	0.5	0.8	0.8	0.9
66. その他	3.2	1.2	5.4	0.6	0.5	0.8	0.6	0.6	0.5	0.3	0.2	0.5	0.8	0.8	0.9
全ジャンル	67.8	55.5	81.3	46.7	35.9	61.7	44.8	32.2	59.6	47.3	35.2	58.3	58.2	50.0	66.5
有効サンプル数	10,275	5,370	4,905	10,250	5,945	4,269	9,453	4,958	4,278	3,724	1,768	1,949	732		

表4 芸術・文化に対する意識

	左の意見 に賛成	どちらとも いえない	右の意見 に賛成	
日本的なものを育てていきたい。	16.2	61.5	20.2	外国からいいものを取り入れてい けばよい。
	14.1	57.8	26.0	
	18.6	65.2	16.0	
	28.5	57.6	9.2	
	14.9	57.4	25.6	
古典的なものを守っていきた い。	12.0	51.8	34.0	現代的な感覚を活かしていき たい。
	14.7	58.9	26.0	
	17.2	55.0	22.8	
	15.5	29.3	53.0	
テーマや素材には日本的なもの を積極的に取り入れるべきだ。	13.0	31.2	53.5	テーマや素材は別に日本的な ものにこだわる必要はない。
	16.7	37.5	45.2	
	20.4	38.7	36.0	
	46.7	35.2	15.8	
芸術振興のために政府・企業の 積極的な支援が必要だ。	39.0	40.1	8.5	芸術振興のためには、芸術・芸 能家の努力が先決だ。
	42.4	40.3	16.8	
	41.3	39.2	13.8	
	27.7	35.7	34.2	
芸術・芸能は生(ライブ)でなけれ ば鑑賞したとはいえない。	22.2	36.0	39.6	芸術・芸能は、生でなくても十分 に鑑賞できる。
	20.3	36.2	42.9	
	21.3	37.0	36.5	
	41.0	29.7	26.9	
芸術・芸能は国の違いを超えて 普遍だ。	40.5	28.8	28.3	芸術・芸能には、その国民でな ければ理解できない面がある。
	41.0	30.2	28.3	
	32.2	33.1	29.5	
	27.7	33.2	36.8	
余暇の多様化に伴い、芸術・芸 能の中で衰退するものも出る。	30.2	34.5	32.9	余暇の時代だからこそ、今後は 芸術・芸能が発展していく。
	35.0	36.8	27.4	
	31.1	39.4	24.2	
	47.3	39.4	10.6	
これからは、芸術・芸能はアマ チュアに広がっていく。	45.2	42.5	9.9	これからは、芸術・芸能は専門 家中心のものとなっていく。
	45.9	43.6	9.8	
	36.3	47.2	11.1	
	45.0	41.3	11.1	
芸能・芸術では、教育よりも才能 の方が重要である。	43.9	41.6	12.1	芸術・芸能には、才能よりも教育 の果たす役割が大きい。
	35.7	48.1	15.7	
	34.2	46.4	14.0	
	32.9	42.4	22.5	
芸術・芸能は時代とともに変化し ていくべきだ。	41.1	39.0	17.6	芸術・芸能は時代に迎合する必 要はない。
	39.6	44.3	15.7	
	35.3	43.7	15.9	
	第1段 第2回調査	10,770		
サンプル数	第2段 第3回調査	9,312		
	第3段 第4回調査	3,721		
	第4段 第5回調査	813		

築され、SASによるマクロプログラムで調査回と使用変数を指定するだけで、集計表の作成や回帰分析などの分析ができるようになっている。

3. ライブによる芸術鑑賞の状況と芸術・文化への意識

「学生調査」の対象母集団は大学をはじめとする高等教育機関に所属する学生であり、なかでも多数を占めるのは18歳から22歳までの就学者である。彼らは、テレビ、ビデオ、CDプレイヤー、DVDプレイヤー、デジタルミュージックプレイヤーなどの情報機器の普及とともに成長し、それらを逸早く生活に取り入れてきた世代である。このような特徴を有する学生にとって、視聴覚機器による実演芸術鑑賞はどのような位置

づけにあるのか、視聴覚機器による鑑賞はライブ鑑賞との間で補完関係にあるのか、あるいは代替関係にあるのかというテーマは、今後の実演芸術の鑑賞構造を考えるにあたっても重要なテーマであると考えられる。

しかし、本研究では、10%抽出のサンプルのデータを用いた分析であることから、実演芸術の過去1年間に限定した鑑賞経験と芸術・文化に対する意識について、単純集計結果を、質問がほぼ同じである第2回から第4回までの調査結果と比較可能な形式で要約して示すだけにとどめておくことにする。

4. 結論と今後の課題

本研究では、第5回学生調査の10%抽出データを用いて、過去20年間以上にわたってカバーしてきた学生の芸術・文化に関する活動や意識の変化の一部を示した。

しかし、本研究で示した第5回調査の集計結果はあくまでも10%抽出のサンプルに基づくものであり、サンプルの抽出方法も完全な無作為ではなく、調査協力者から送付されたクラス単位の調査票の回収用封筒を無作為に選択して入力したものである。また、母集団の状況を推定するには、各個票データの母集団復元乗率に基づく重み付けの調整が必要であるといった課題が残されている。

未入力 of 調査票の入力作業など、今後に残された課題は大きいですが、きちんと課題をクリアして、芸術・文化の需要の側面の研究にマイクロデータに基づく分析によって貢献していきたい。

謝辞

第1回から第5回までの学生調査を行うにあたっては、科学研究費の補助金を受けて編成された研究会のメンバーの諸先生方（三善[10]、永山[9]、杉江[8]、周防[7]）の検討の結果としての調査票が使用されており、調査票の配布・学生への説明・調査票の回収に関しては、多くの高等教育機関の関係者の方々から多大な協力を頂いている。さらに、第1回から第5回までの調査では、調査対象となった学生の皆様には多岐にわたる詳細な質問への回答にご協力頂いた。ここに記して感謝いたします。ただし、ありうべき誤謬は全て筆者に帰するものである。

参考文献

- [1]有馬昌宏、「消費支出と行動実態から見た芸術・文化の需要構造」、『季刊家計経済研究』, No.79, pp.13-29, 2008.
- [2]有馬昌宏、「学生の実演芸術の鑑賞行動を規定する要因についての基礎的分析」、『文化経済学会<日本>年次大会予稿集：2008』, pp.14-15, 2008.
- [3]有馬昌宏、「全国学生調査に基づく実演芸術鑑賞行動の規定要因の分析」、『2008 SASユーザー総会 アカデミア/テクノロジー&ソリューションセッション 論文集』, pp.93-102, 2008.
- [4]伊藤裕夫, 小林真理, 中川幾郎他, 『新訂アーツ・マネジメント概論』, 水曜社, 2002.
- [5]加藤優希・有馬昌宏, 「学生の実演芸術鑑賞行動の規定要因に関する基礎的研究—過去25年間の学生調査データベースの構築と分析を通して—」, 『文化経済学会<日本>年次大会予稿集：2010』, pp.12-13, 2010.

- [6]加藤優希・有馬昌宏, 「5回の学生調査から探る実演芸術鑑賞行動パターンとその規定要因～学生調査データベースの構築と分析を通して～」, 『2010 SASユーザー総会 アカデミア/テクノロジー&ソリューションセッション 論文集』, pp.387-395, 2010.
- [7]周防節雄(編), 『芸術・文化政策立案のための統計指標の開発と体系化に関する研究』(平成13年度～平成15年度科学研究費補助金(特別研究促進費(1))研究成果報告書), 2004.
- [8]杉江淑子(編), 『実演芸術の需要の実態と構造に関する統計情報の収集と時系列分析』(平成10年度科学研究費補助金(特定領域研究A)公募研究成果報告書), 1999.
- [9]永山貞則(編), 『わが国文化・芸術情報の体系化と統計調査方法の研究』(平成3年度科学研究費補助金(総合研究(A)研究課題番号 02305009)研究成果報告書), 1992.
- [10]三善晃(編), 『わが国の芸術活動の動向予測に関する基礎研究』(昭和62年度科学研究費補助金(特定研究(1)研究課題番号 62124014)研究成果報告書), 1988.